

大学教育と読書
大学生協からの問題提起

目 次

第1部 大学教育と読書

序章 なぜ「大学教育と読書」をテーマとするのか?	2
第1章 21世紀スキルを学ぶ機会としての読書	10
1. 読書の持つ意味	10
2. 読書の現状	14
3. 大学生の読書の状況	18
4. 読書と大学教育	19
5. 小学校から大学までの連携の重要性	21
6. 読書の効用	23
7. 日本の大学教育の課題	25
第2章 アメリカにおける大学教育とリーディング・テクニク	30
1. アメリカにおける大学教育	30
2. なぜアメリカの大学生はそんなに勉強するのか	32
3. アメリカの大学におけるインターンシップ制度	33
4. アメリカの大学での課題図書	34
5. アメリカの大学での留学時代	35
6. リーディングのテクニク	35
7. アメリカの大学では文学の授業は教養課程において必修科目	41
第3章 初年次教育の重要性とリーディング&ライティング	43
1. はじめに	43
2. 担当授業科目「基礎演習」の概要	44
3. 授業計画の変遷	45
4. 2015年度の授業実践の詳細	50
5. 学生の問題とは	53

6. 授業アンケートにみる学生の論文作成に対する評価	56
7. ライティング教育プログラム編成の課題	61
第4章 大学図書館におけるラーニングcommonsの取組と読書	64
1. はじめに	64
2. 学生にとって「読書」とは?	66
3. 教職員が考える「読書」	69
4. 「社会を考える読書会」	70
5. 読書推進のこれから	72
第5章 大学教育における電子図書利用の有用性と可能性	75
1. はじめに	75
2. 大学教育におけるデジタルテキスト導入の現状	76
3. デジタルテキストを用いた英語リスニングの授業	80
4. デジタルによる知的活動：本棚と文机としてのデバイス	87
5. 大学における電子書籍の有用性と可能性	89
6. 生協によるサポート	95
第6章 大学教育と読書をめぐって	98

第2部 大学・学生をめぐる諸課題と大学生協

第1章 読書を身近に―読書時間0を1にするために―	106
1. はじめに	106
2. 大学生の読書状況と読書推進企画	107
3. バトルから読書へ―書評対決・ビブリオバトル・ショセキカという 挑戦―	109

第2章 大学生協の食堂や共済の事業への教職員のかかわり方	113
1. はじめに	113
2. 大学生協食堂事業の現状とあるべき視点	114
3. フードサービスから食育事業に	115
4. 学生の学業継続と社会人基礎力養成に寄り添う大学生協の共済事業	117
第3章 環境と防災—里海に学ぶ、地域と世代をつなぐ—	120
1. はじめに	120
2. アマモ場再生活動 30 年の歩み	121
3. 「全国アマモサミット」での学びと愛媛大学生協の環境活動	123
第4章 平和活動の課題と展望	126
1. はじめに	126
2. 2015 年度東北ブロックでの平和活動を通じて	127
3. 京滋・奈良の平和学習の取組—ピースナウ舞鶴とピースナウ奈良の 取組から—	129
第5章 協同組合論の学びを創る	131
1. はじめに	131
2. 賀川豊彦の経済哲学とその現代的意義	132
3. 愛媛大学における集中講義「協同組合とは何か」の実施	135
第6章 特別講演 里海、里山に学ぶ	138
あとがき	144

第1部

大学教育と読書

序 章

なぜ「大学教育と読書」をテーマとするのか？

玉真之介¹

危機感

本書の第1部は、2016年9月2日に岡山市で全国大学生協連教職員委員会が開催した「全国教職員セミナー in 岡山」における「能動的学習と読書—リーディングリスト運動：理論編」というシンポジウムに基づいて編集したものである。シンポジウムのタイトルにある「能動的学習」とは、言うまでもなく現在の大学教育が意識的に取り組むことを求められている教育方法である。つまり、このシンポジウムは、大学教育改革の課題として学生の読書を取り上げたのである。そこで、なぜ大学生協教職員委員会が「大学教育と読書」をシンポジウムのテーマとして取り上げたのかについて最初に述べることにしたい。

それは、一言で言えば大学生協関係者の危機感である。学生の読書離れは決して最近の現象ではなく、高度成長期に大学が大衆化していった頃から繰り返し問題にされてきた。全国大学生協連合会が長きにわたって実施してきた学生生活実態調査においても、1週間の平均読書時間がゼロ分という学生の比率は、ずいぶん前から4割を超えていた。学生に読書を薦める取組も、『読書のいずみ』や読書マラソンをはじめとして様々に展開されてきた。その意味で、学生の読書離れは、いまことさらに取り上げる必要があるテーマとは言えないかもしれない。しかし、私たちは以下の3つの理由で、学生の読書離れの問題

¹ 徳島大学生物資源産業学部教授

を大学教育の根幹に関わる問題として、いま取り上げる必要があると考えたのである。

世界潮流の変化

その第1の理由は、今日の“脱グローバル化”とも言える世界の変化である。2016年のイギリスによるEU離脱。そして、アメリカ大統領選挙におけるトランプ大統領の当選。この2つは、いずれも1990年代以来、強まってきたグローバル化の潮流とは逆の潮流が、いまや無視できないまでに力を増したことをしめすものと言うことができる。すでに2008年のリーマンショック以降、ロシアや中国が存在感を高める中でアメリカの覇権の衰えが顕著となり、原理主義や地域主義、国家主義が台頭して地域紛争も多発するようになってきている。

かつて、いまとは逆に人・物・金・情報が国民国家の壁を乗り越えて自由に動き回るグローバル化の潮流が顕著となった時に、スーザン・ストレンジは『国家の退場』（岩波書店、1998）という本を書き、その中で「ピノキオ問題」という提起を行った。それは魔法によって本物の少年となったピノキオが直面した問題。すなわち、もはやウソについても鼻は伸びない。操ってくれる糸もない。歴史が大きく転換していく中で、どの権威を尊重し、どの権威に挑戦するのか、そして何をすべきか、それらはもはや従来のものの見方の延長線上で考えるわけにはいかず、自分自身で判断し、決断しなければならないのだと。

先述のように、歴史が再び逆転し、「国家の退場」から「国家の復権」の動きが強まり、国家主義的な動きや運動、そして国家間の緊張が高まる中で、私たちは再び「ピノキオ問題」に直面していると言えるだろう。そして、「ピノキオ問題」に学生たちが自ら答えを見つけていくためには、やはり読書が重要だと言わざるを得ないだろう。とりわけ、古典を含む人文・社会系の読書が。

しかし、この10年間に全国の大学生協の書籍事業は全体で25%も供給が減少し、しかも人文・社会系の図書の販売が激減しているのである。このようなことで時代の変化に対し、学生たちは自らの確な判断が下せるのだろうか。時々の風潮やプロパガンダに流されてしまったり、政府やマスコミに対して批判的視点を持つことなく、付和雷同的に追従してしまったりする傾向が強まる

のではないか。そのような危機感である。

高度情報化社会

第2の理由は、インターネットの発達による高度情報化の進展、ならびにスマホに代表される情報デバイスの普及である。中学生・高校生の時点でスマホ・デビューし、SNSが日常生活の一部となっている学生たちは、ある面では情報化時代に高い適応能力を有するとも言えるのかもしれない。これは、時代のなせる技であり、避けがたい傾向とも言えるのかもしれない。

大学教育の現場においても、学生のスマホ利用は顕著となっている。不明点の解消やレポート作成など、まずはスマホで検索をかけることが習慣化しているように見える。Web上の情報をコピー&ペーストするだけでレポートをまとめることが問題視されるようになって久しく、それは学位論文にまでおよんでいることがニュースにもなった。要するに、あらゆる情報をWeb上から得るだけで、考察をすませてしまう傾向が学生の間で強まっているように見えるのである。

しかし、Web上の情報への依存は、言うまでもなく重大な問題点を含んでいる。それはあまりにも簡単で便利であるがゆえに、真偽が不確かな情報を鵜呑みにしたり、情報が断片にとどまり、一方的、一面的なものであったりする危険が少なからずある。何よりも表面的な情報だけにとどまって、ものごとを体系的、系統的に掘り下げて考える姿勢や志向性が身につかないでしまうという問題である。

ものごとを表面だけではなく、全体を見失うことなく、問題を掘り下げて考える力を身につけるためには、やはり一定量の読書は欠かせないだろう。また、学生時代に読書の習慣を身につけることが、社会に出てからも、とりわけ重要と言える。その意味でも、学生のWeb情報への依存の傾向を大学教育は直視する必要がある、それをただ時代のなせる業として放置するのではなく、教育プログラムの中で適切な方向へと導いていく必要があるだろう。それは、学生に「ピノキオ問題」に対する自分なりの考えを持つ力を養うためにも必要であると考えられる。

アクティブラーニング

第3の理由は、大学教育の現場における教育改善の動き、とりわけアクティブラーニング（「能動的学習」）への取組についてである。平成24年の中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』において、高度情報化時代を踏まえて知識伝達を中心としたこれまでの大学教育を主体的に学ぶ力を身につけさせる教育へと質的に転換することが提起された。そこでのキーワードがアクティブラーニング（「能動的学習」）であった。これを受けて、全国の大学においては、アクティブラーニング（「能動的学習」）を取り入れる取組が様々に取組まれている。しかし、そこでは、アクティブラーニングという目新しい言葉にいささか幻惑されて、主体的学習、能動的学習の基本としての読書、ないしリーディングに対して十分な関心が向けられていないという危機感がある。

教養教育において旧制高校の伝統を引き継いだわが国の大学教育では、読書は学生自身が自主的に行うものであるといった観念が強く、アメリカにおけるリーディング・アサインメントのように大学教育自体に読書が構造化されて来なかった。教室外学習時間の増加が問題にされているが、そこでも読書ないしリーディングを位置づける取組が意識的かつ積極的になされているようには感じられない。その背景には、日本の大学教育および大学教員が基本的に専門教育を重視し、教養教育を軽視しているという根本的な問題が内在しているようにも考えられる。これは、過去の延長線上で先を見通せば良かった時代には問題なかったかもしれないが、「ピノキオ問題」に直面した時代にはきわめて不安を抱かざるをえないのである。

リーディングリスト運動

以上の3つの理由から、私たち全国大学生協教職員委員会は、学生に読書を薦める運動を改めて提起することにした。それがリーディングリスト運動である。しかし、私たち教職員委員会は、読書推進という活動の難しさも身に沁みて感じてきた。過去にもしばしば取組を行ってきたが、なかなか成果が出せない。その結果が学生の読書の現状である。このために、この運動を始めるに

6 第1部 大学教育と読書

あたっては、「またやるの?」「どうやって?」という議論も展開された。また、「読書とは何か?」「漫画は読書か?」といった議論もなされた。

今回提起したリーディングリスト運動のポイントは、先に述べたように、これまでの日本の大学教育が学生の読書を教育カリキュラムや授業の中に明確に位置づけてこなかった反省にたつて、現在進められている大学教育改革の中に読書を取り入れることを提起する点に新しさがある。授業内容のより深い理解、関連する理解、教室外学習のために、一人ひとりの教員が適切な文献のリストを提示することを、大学教育改革の柱とすることの提起である。かつてシラバスの作成が授業改善の方法として組織的に取り組まれたように、リーディングリストの提示を授業改善の柱として組織的に取り組むことの提起である。

この趣旨を全国大学生協連教職員委員会は、2015年2月に「新教養主義とリーディングリスト運動への賛同とご協力を!」というメッセージにまとめてすべての大学人に向けて発した(後掲)。そこでは、流動化を強める世界の動きに触れた上で、古典をはじめとした人類の英知や文化の多様性の理解に向けて学生が読書することの大切さについて改めて表明した。その上で、学生が本を読む文化を復興する挑戦を「新教養主義」とよんで、リーディングリスト運動を次のように提示した。すなわち、授業の最初にリーディングリストを提示して、読書を学生に課題として課して、授業の到達目標に加えるということである。

第1部の構成

この提起のための理論武装を意図したのが今回のシンポジウムであった。最初の川嶋太津夫氏(大阪大学)による「21世紀スキルを学ぶ機会としての読書」は、シンポジウムにおける基調報告であった。そこでは、高校生や大学生における読書の現状を踏まえた上で、読書が持っている教育的な効果を21世紀スキルとして特徴付け、大学教育に読書を取り入れる上での課題が整理されている。

シンポジウムでは、それに続いて、4つの報告がなされた。最初の報告は、橘由加氏(東北大学)による「アメリカにおける大学教育とリーディング・テクニク」である。そこでは、アメリカの大学教育においてリーディングが

いかに重要視されているか、言い換えると大学教育に読書が構造化されているか、について述べるとともに、学生はそこで3つのテクニック、すなわちスキミング（速読）、スキヤニング（探索読み）、クリティカル・リーディング（分析読み／精読）などのテクニックをスキルとして身につけて学んでいくことが述べられている。

第2の報告は、杉谷祐美子氏（青山学院大学）による「初年次教育の重要性とリーディング&ライティング」である。そこでは、杉谷氏自身の初年次教育の実践を踏まえて、レポート・ライティングというスキルの修得においてリーディング・スキルが不可欠であることが論じられる。第3報告は、佐々木俊介氏（桜美林大学）による「大学図書館におけるラーニングコモنزの取組みと読書」である。この報告では、全国の大学図書館におけるラーニングコモنزの広がりを中教審答申が提起したアクティブラーニングとの関係で述べた上で、学生の読書に対するイメージが持つ問題と、それを踏まえた佐々木氏の図書館職員としての実践が述べられている。

最後に、第4報告は針持和郎氏（広島修道大学）による「大学教育における電子図書利用の有効性と可能性」である。情報化の進展と共に読書もデジタルデバイスを利用したものへ移行していく可能性がある。針持氏は、自身の英語教育に全国で最も早くデジタルテキストを活用した実践を踏まえて、それがもたらす効果と問題を整理し、その有効性を検証している。

以上のように、このシンポジウムは、読書を学生の余暇や趣味としてではなく、大学教育の質的転換の問題として正面から取り上げたものである。いずれの報告も、大学教育において読書ないしリーディングのスキルやその量と質がきわめて重要性であることが明確になった。ただし、読書ないしリーディングを大学教育に構造化していくには、難しい課題もあることもわかってきた。しかし、こうした点が現在の大学教育において広く認識されているかと言えば、決してそのようには思われぬ。まずは、より多くの大学関係者が読書ないしリーディングの大学教育における重要性とその現状を認識として共有するところから改善の方策も議論が広がるものと思われる。その意味で、このシンポジウムの内容を書籍として刊行した意図がそこにあるのである。

すべての大学人のみなさまへ

新教養主義とリーディングリスト運動へのご賛同とご協力を！

全国大学生協連合会・教職員委員会

いま世界は、かつてのグローバル化とは様相を異にしています。アメリカの覇権が衰え、ロシア、中国の存在感が高まり、アジア諸国の経済成長が進む中で、原理主義、地域主義、国家主義が台頭して地域紛争も多発しています。

その一方で、平和構築や地球温暖化への国家を超えた連携・協力が、防災の課題と合わせて、これまで以上に強く求められています。こうした時代を私たちは、「グローバル新時代」と呼ぶことにしました。

このように多極化、流動化する世界を前に、私たちは大学生にもっと本を読んでほしいと強く思います。それも、古典をはじめとした人類の英知や文化の多様性の理解に向けた読書です。

しかるに、私たち全国大学生協連合会が実施した学生生活実態調査によると1週間の平均読書時間が0分という学生が4割に達しています。大学生協の書籍事業も、この10年間に25%以上も供給が減少しています。とりわけ、人文・社会系の図書の販売が減少しています。

私たちは、この現実を抗しがたい趨勢として傍観するわけにはいきません。大学人の力を結集して、本を読む文化の復興に挑戦すべきであると思います。それが「グローバル新時代の読書と教養ルネッサンス」、略して「新教養主義」です。

私たちは、この旗印の下で、「リーディングリスト運動」を提起したいと思えます。これは、日本の大学教育が、学生の読書を教育システムに組み込んでこなかったことへの反省にたったものです。

まずは多くの授業の最初に、リーディングリストを学生に示すことを呼びかけます。いかなる授業にも、バックグラウンドとなる基本図書や関連図書があるはずで、それらをリストで示して、そのレビューを成績評価にも関連させれば、学生の勉学時間も増え、読書が大学教育に構造化されていく可能性があります。

私たちはまた、授業にとどまらず、新入生向けや様々なテーマ（環境問題や平和構築、協同組合など）についても、リーディングリストを作成して学生に提示する取組を呼びかけます。こうした多様なリーディングリストの提示を、学生たち自身の読書マラソンなどの読書推進運動とリンクして、大学に読書と教養の復興を目指します。

「本当の読書は、単に表面的な知識で人を飾り立てるのではなく、内面から人を変え、思慮深さと賢明さをもたらし、人間性に深みを与えるものである。」（平野啓一郎『本の読み方』PHP 新書）

学生時代に読書が習慣化されれば、卒業後の学生の人生がより豊になることは間違いありません。また、社会の様々な課題に対して、彼ら・彼女らがより積極的にかかわっていくことにつながると思います。

私たちのこの思いにご理解をいただき、すべての大学人が新教養主義とリーディングリスト運動にご賛同とご協力をいただけるよう心よりお願いいたします。

(2015年2月)